ウォール街占拠運動―新しい社会運動の可能性（上）

青野恵美子　明治大学労働教育メディア研究センター
高須裕彦　一橋大学大学院社会学研究科フェアレイバー研究教育センター

目次

はじめに

ウォール街近くの小さな公園で占拠がはじまったのは二〇一一年九月一七日である。当初は、チェースマンハッタン・プラザを占拠する予定だったが、封鎖されて入れず、場所を変更して Zuccotti Park（ズコッティ公園）に一〇〇〇名ほどの人々が集まった。

彼らが占拠する背景には、一％の富裕層の人々と、"We are the 99%."（私たちは九九％）を掲げる貧困化する人々との間の、格差拡大への怒りがある。

そして、これがウォール街占拠運動として全米の都市に拡がるとは、どれだけの人が想像できただろうか。

当初、マスコミや一般の人々は関心を示さなかった。それが一変したのは、インターネットで流れた映像がきっかけだった。占拠運動に参加して、歩道で抗議行動をしていた女性たちが、警官にペッパースプレーを吹き付けられ、彼女たちの泣き叫ぶシーンが YouTube で流れると大反響が起きた。[1] 警官の暴力的な弾圧に対して、市民の怒りが爆発する。そして、一〇月一日にブルックリン橋でデモ隊七〇〇名が逮捕されると、全米のみならず全世界にウォール街占拠運動が知れ渡ったのである。

その後は、二〇一一年一一月一五日に占拠する人々が警察によって強制排除されるまで、占

拠運動は、労働組合も巻き込んで大きな盛り上がりを見せた。私たちが調査・撮影でウォール街に通うことになったのは、ちょうどその時期である。一一月一七日にニューヨークを離れたため、排除されるまでの最後の三週間を見たことになる。

ウォール街占拠運動とは何か。その実態について、そこに参加する人々との出会いをとおしてわかってきたことを報告する。[2] まず、「**一 社会運動の変革と支える人々**」で、ウォール街占拠運動の現場の様子と占拠運動に参加する人々、占拠運動の方法について論じる。「**二 ウォール街占拠運動をどう見るか**」で占拠運動の位置、その経過と特徴、私たちの学ぶべきものを論じる。

一 社会運動の変革と支える人々

1 社会運動を変革する

(1) 二〇一一年一一月のズコッティ公園

私たちが初めて訪れたとき、晩秋とはいえ、ズコッティ公園は凍えるような寒さだった。すぐ向かいには、あのワールド・トレード・センターの跡地があって、巨大なビル建設が進んでいた。さらに三方をビルに囲まれているため、公園には強風が吹き下ろし、体感温度がどんどん下がっていくのがわかる。ここで夜を越すのはつらい、とまっ先にそう思った。

ズコッティ公園は三一〇〇平方メートルほどの狭いスペースである。そこに数百人がぎゅうぎゅう詰めでテントを張りつめている。辛うじてひとりが歩ける狭い道ができていて、そこを観光客も含めた大勢の人たちが行き来する。初めて訪れた日、ここでだれが何をしているのか、さっぱりわからなかった。

二日目、狭い道の脇に、人の集団ができているのに気づく。一五人ほどが輪になって、議論が盛んだ。ボードには Think Tank（シンク・タンク）と書かれている。さらに公園の中央には一番大きなテントが常設されていて、無料で食事を提供していた。いくつかのテントの中では、ビジターの対応に忙しそうだ。よくみると、所々のテントには、法律、情報、有色人種、メディア、健康などと名前が書かれている。ビジターは自分が必要とする、関心のあるテントを訪れることができるらしい。

屋外図書スペースもある。様々な本がぎっしりと並んでいるから、古本屋のようだ。数日すると、そこに屋根ができて、雨風を凌ぐことができるようになった。占拠者のための生活環境がどんどんと整備されていくのがわかる。

しかし、人々はここで何をしようとしているのか、ますますわからなくなった。占拠運動にリーダーや中心人物はいないと言う。そうだとすると、私たちがこの運動を理解するには、どうしたらよいのだろうか。

ウォール街占拠運動は、インターネットを活用した運動である。それは YouTube に流れた映像で運動に火がついたことからもいえる。さらに、映像だけでなく、占拠運動やそれに関連するウェブサイトには膨大な情報が掲載されている。そのため、日々インターネットを注意深くチェックしていれば、日本にいてもある程度までは運動の実態について知ることができるだろう。

しかし、インターネットの情報だけでわからないのが、運動に参加している人々に関する情報である。ソーシャル・ネットワーク・メディアと言われる Twitter や Facebook にうまくアクセスできれば、彼らの個人的背景を含めて運動に参加する動機についても知ることができるかもしれない。しかし、日本ではその手がかりに乏しく、参加者の素顔を知ることは難しいと判断した。

そこで、私たちは「ズコッティ公園」で占拠現場の空気にふれながら、そこを占拠し通ってくる人々に会い、なぜ運動に参加するのかをインタビューすることにした。占拠運動は、参加する人の数だけ無数の顔をもっているに違いない。そこから特長的ないくつかの顔を見出すことができるかもしれないと考えた。

さらに今回、インタビューのようすをビデオで撮影してまとめたのが、ビデオ『ウォール街占拠２０１１』（Labor Now 2012）である。そこに登場する人々の肌の色は様々だ。職業も文

化も多様である。それを知るには、映像メディアがもつ情報量に勝るものはない、と普段から感じている。そこで、私たちはビデオ・インタビューを行なうことにした。

(2) ウォール街占拠運動のキーパーソン

だれにインタビューをするのか、それをだれに相談するのかは、最初の難題である。私たちが最初に相談したのが、ニューヨーク市立大学の教授で、移民や低賃金労働者の労働運動について調査しているImmanuel Ness（イマニュエル・ネス）である。彼が迷うことなく紹介してくれたのが、Marina Sitrin（マリーナ・シトリン）だった。

シトリンはウォール街占拠運動のキーパーソンのひとりと言えるだろう。彼女のウェブサイト[3]をみると、活動家、著述家、弁護士と自己紹介している。ニューヨークでの所属先は、CUNY Graduate Center, Commitee on Globalization and Social Change（ニューヨーク市立大学大学院・グローバリゼーションと社会変革委員会）である。

同センターで初めてシトリンに会ったとき、Horizontalism（水平主義）という聞き慣れない言葉を聞いた。「そのコンセプトは、ヒエラルキーと権威への批判の具体化だが、それ以上に新しい関係をつくること」と、自身の論文（Sitrin 2011, 8）で書いている。

そして、文字どおりの「水平主義」を実践したのが、二〇〇一年のアルゼンチンの経済危機のなかでのコミュニティ運動だったという。すべてを失った人々が始めたのは、集い、支え合うことだった。そこには「イデオロギー的な決定も、知的で学問的で政治的な決定もない」（Sitrin 2011, 9）。参加者一人ひとりの合意形成にもとづいた、生活を取り戻すための運動である。

いくつかのコミュニティでは倒産した銀行のビルを占拠して、コミュニティ・センターをつくった。そこには、キッチンや印刷所、デイケアセンター、放課後のプログラム、図書館、小規模ビジネス、フリー・インターネット、ミニ・シアターが入っていた。

こうした集まりやコミュニティは、財政危機から数年のうちで数百に増え、一〇〇～三〇〇人の参加者で成り立っていたという。「水平主義へと向かわせる弾みのひとつには、当局を信用できないことが関係していると思う」（Sitrin 2011, 10）と、コミュニティ運動の参加者は言う。

シトリンはアルゼンチンのコミュニティの運動についてHorizontalism: Voices of Popular Power in Argentina（Sitrin 2006）という本にまとめた。そして、アルゼンチンの経験をもとにウォール街占拠運動のなかで「水平主義」を実践しようと、二〇一一年九月一七日の占拠スタート前の準備段階から、この運動に深く関わる一人となったのである。

(3) すべての参加者の合意による集会

カナダの雑誌Adbusters（アドバスターズ）が二〇一一年七月一三日、インターネット上でウォール街占拠を呼びかけたことは良く知られている[4]。しかし、占拠運動の準備についてくわしい記事には、「後にニューヨークシティ全体集会を生み出した現実のグループがいなければ、今私たちが知っているようなウォール街占拠は存在しなかったかもしれない。」（Kroll 2011：クロール二〇一二、三四頁）とある。

その「現実のグループ」の中に、中心メンバーとしてシトリンが入っていた。他には、芸術家や学生、活動家、作家のグループがいる。シトリンは、このグループの準備会議で、進行役であるファシリテーターを務めた。「水平主義」を実践するには、ファシリテーターの役割が重要になるからだ。

このとき、「水平主義」の運動をめざしたもう一人のキーパーソンがいる。人類学者でアナーキストのDavid Graeber（デビット・グレーバー）である。彼は、全体集会、つまりすべての参加者の合意（Consensus）による集会を、ニューヨーク市でも実現させようとしていた。当初、これは無謀な試みと思われた。「合意進行は、（中略）ニューヨーク市で予想されるような大集会ではこれまで例がなかった。ギリシャやスペインの全体集会でさえ、試みていない。」（Graeber 2011：グレーバー二〇一二、四

二〜四三頁）からである。

占拠運動に全体集会を取り入れようと提案したのは、準備会議に参加していたスペイン人のカップルだった。二人は、二〇一一年五月一五日にスペインで起きた抗議運動「15M運動」の経験を占拠運動に生かそうと提案する。それが、すべての参加者の合意による全体集会だった。全体集会に馴染みのなかった準備会議の参加者たちは、スペイン人によって書かれた全体集会のハウツー・ガイド"How to cook a non-violent #revolution"（非暴力革命のつくり方）[5]を参考にしたという（Kroll 2011：クロール二〇一二、三五〜三八頁）。

当初は無謀な試みと思われた全体集会は、占拠から三ヵ月後、「アメリカ全土で大小数百の集会が合意によって運営されている。決定は投票ではなく、全体の賛同により民主的に行われる。世間一般の通念では不可能とされているが、それは実際に起きている」（Graeber 2011：グレーバー二〇一二、四三頁）と、グレーバーは書いている。

全体集会のような「直接民主主義」の方法を、なぜ人々は求めたのか——。この後に登場する運動参加者の問題意識と、運動の手法という二つの側面からみていくことにする。

2　ウォール街占拠運動に参加する人々

(1)　学生の活動家

日本で占拠運動に関連したYouTubeの映像を見ていると、若者の姿が多いことに気づく。YouTubeにアクセスする人の多くが若い世代であることが関係しているだろうが、実際はどうなのか。そこで、学生へのインタビューを試みた。

知人の大学教員に数名の大学生を紹介してもらったが、なかなかインタビューまでにはこぎつけない。人づてに出会ったのが、当時高校三年生のLucas Vazquez（ルーカス・バスケス）だった。高校生と聞いて、運動に参加する動機などについて明快な答えを期待できないのではないかと思ったが、それは大いなる偏見であることがインタビューを始めてすぐにわかった。

バスケスはアルゼンチン系アメリカ人だった。両親が軍事政権を逃れてニューヨークに移住していたため、彼の育った環境は、彼を必然的に社会問題に向かわせた。

バスケスは七月の「アドバスターズ」の呼びかけに応えて、友人と一緒に八月二日の占拠のための準備会議に参加した。占拠が始まると、いくつかのワーキング・グループの活動にも参加した。その一つが、シトリンが運動のなかで重要な役割を果たすと言っていたファシリテーションである。

バスケスがこのグループに熱心に参加するのには理由があった。高校の友人たちに呼びかけて、「高校占拠」を実現したいと考えていたからだ。そのためには、リーダーが呼びかけて先導するのではなく、すべての参加者の合意による運動をつくりたいと考えていた。そのために彼は、ファシリテーションのワーキング・グループに参加し、その手法について学んでいる最中だった。

さらにバスケスは、Labor Outreach（労働支援）のワーキング・グループにも参加した。インタビュー当時、マンハッタンにあるサザビーズ社というオークション会社で労働争議が発生していた。同社の組合員を抱える「チームスターズ」のほか、支援する労働組合だけでなく、占拠運動に参加していた学生を中心とする若者たちは、労働争議の支援に駆けつけた。

なぜ占拠運動に参加するのか。彼の答えは明快だった。大学の学費の値上げや就職率の悪化、大学生時代に背負ってしまう多額のローンなど、大学生が抱える問題は深刻である。目前まで来ている将来の大学生生活を想い、高校生として運動に参加したい、という彼の気持ちは前向きだった。

バスケスは二〇一二年秋からニューヨーク大学の学生になるという。彼にとっては、これからが本番と言えるだろう。全米の各大学のキャンパスには無数のバスケスが存在しているに違いない。彼へのインタビューのあと、私たちは

ウォール街占拠運動に邁進する若者たちの姿を容易に想像することができた。

(2) 有色人種の存在

これまでに「ワーキング・グループ」という言葉を頻繁に使ってきた。それは、ウォール街占拠運動において重要な機能を果たしているからだ。ワーキング・グループのなかには、三つの「コーカス」が存在する。これらは、社会的に周縁化された経験をもつ人々の自己決定グループを意味し、女性、有色人種（People of Color）、LGBT[6]に分かれる。

Sonny Suchdev（ソニー・スチュデヴ）はインド系アメリカ人で、有色人種のコーカスの世話人として、占拠運動に熱心に関わっている。三一歳の彼は、トランペットとパーカッション演奏家、高校の音楽教師、労働組合のオルグという職業経験をもつ。

スチュデヴはウォール街占拠運動の目新しさとして、白人の中流階級による占拠運動への合流を挙げた。労働者や移民など貧困に苦しんできた人々と、中流社会の利害が一致したと、指摘する。

しかし、そのことは同時に、有色人種が運動から疎外されるのではないか、という懸念を生んだ。そこで一〇月一日に有色人種のコーカスをスタートさせ、彼らの意見を運動に反映させるシステムをつくった。

それは、コーカスのなかにワーキング・グループに対応する一〇余りのサブ委員会をつくることにある。サブ委員会のメンバーは各ワーキング・グループにも参加することで、有色人種の意見を占拠運動に反映させよう、というしくみである。

メディアのワーキング・グループには、実際に有色人種や女性のメンバーが少ないという。そうなれば、有色人種や女性に関する情報の発信について、公平性への疑問が残る。しかし、コーカスのなかにメディアのサブ委員会をつくることで、メディアのワーキング・グループに女性と有色人種が参加しやすい環境をつくろうとしているのだ。

私たちはスチュデヴへのインタビューの後、コーカスの会議のようすを撮影させてほしいと頼んだ。人種や年齢構成がどうなっているのか、関心があったからだ。

その日の参加者は五〇名ほどで、年代は一〇代から六〇代くらいまでと幅広かった。なかでも二〇～三〇代がもっとも多いようにみえた。人種は、スチュデヴのような南アジア系、中南米系、黒人という顔ぶれである。会場のあるウォール街のすぐ北側にはチャイナタウンがある。しかし、中国系の顔は六〇代とおぼしき男性一人だけだった。彼は研究者で、この運動に熱心に関わっている人物らしかった。

中国やコリア、日系アメリカ人の参加者が少ないのはなぜか。その疑問は現在も残ったままだ。しかし、「チャイナタウンの不在」という文章のなかに、その疑問を解くヒントがあった。筆者のAudrea Lim（オードリー・リム）は次のように書いている。

「おそらくチャイナタウンの低所得労働者や住人は、OWS[7]のメッセージを理解している。でも、OWSは、チャイナタウンについて、あるいは、そこの人々が何のために闘っているのか、理解しているのだろうか。OWSは、だれも排除したくない。だから、九九%という言葉を使うのだけれど、一世紀にわたって、外部から認められることも支援されることもなく、人種差別に反対し、また経済的・社会的な安定を求めて自分たちで組織化してきたコミュニティに対して、何ができるのだろうか。」（Lim2011, 104：リム二〇一二、六九頁）

(3) 運動メディアを支える

冒頭でも述べたとおり、ウォール街占拠運動はインターネットを活用した運動である。YouTubeには占拠運動に関係する無数の映像が流れている。これらは、個人またはグループが、様々な角度から発信する情報である。私たちも今回のインタビュー映像を編集して、『ウォール街占拠２０１１』としてYouTubeにアップした。

また、ウォール街占拠運動のウェブサイトがある。ここでは、運動における日々の活動のようすが刻々と伝えられている。緊急性を要するときや重要なデモや集会については、ライブス

トリーミングでリアルタイムに視聴することもできる。

このような運動からの情報発信を行なっているのがメディアのワーキング・グループである。同グループは写真やビデオ、ラジオ、中継などのグループに分かれ、三〇〇名ほどが参加する。しかし、グループの世話人をする写真家のDavid Stam（デビット・スタン）によれば、実際の発信に関わっているのは三〇名程度だという。

有色人種のコーカスから参加しているKanene Holder（カネネ・ホールダー、カリブ系）は、その理由について、ふだんの仕事や生活のなかで適宜メディアを発信していくのは大変な作業であると語った。また、ある程度の技術も必要になる。そのためか三〇名のメンバーの多くがフリーランスとしてメディアの仕事に就いているという。

彼らはときに、仕事としてのメディアと運動としてのメディアとの狭間で、矛盾に苦しむことになる。仕事で関わるメディア機関が占拠運動の抗議の矛先になることがあるからだ。また、デモの撮影中に警察に逮捕されて、メディアの仕事を失うという事態も起きている。

運動としてのメディアの存在は、今や欠かせない。そこに携わる人々はその意義を深く理解しつつも、その力を充分に発揮できないというもどかしさを感じているに違いない。

それでも、環境問題に長年とりくんできた写真家のスタンは、「私たちが声をあげられる唯一の方法は、同じ考えの人が集まって、決定への参加を求めること」と語る。そして、ホールダーが言うように「社会・経済正義や平等に関わるテーマで、メディアを占拠する」ときは訪れるのだろうか。

ここに紹介した五人のインタビューからは、それぞれの問題意識がみえてくる。五人は、年代も人種も職業も違う。そのため問題意識が違って当然なのだ。優先する課題や要求も違うだろう。そのため占拠運動は、統一要求をつくらない。そうでなければ九九％の人々とつながることができないからだ。占拠運動は、こうしたすべての人を尊重しながら、前進し続けている。

(4) オープンブログに登場する人々

今回インタビューした五人の周囲には、さらに多くの運動を支持する人たちがいる。五人は、積極的に運動に参加する目立った存在だが、ズッコティ公園や会議に姿を現さない、参加できない人たちもいる。そんな彼らの素顔と抱える問題を明らかにしたサイトがある。tumblr（タンブラー）[8]というウェブサービスを活用したオープンブログ“We Are The 99 Percent”（私たちは九九％だ）[9]には、運動に賛同する無数の人たちが登場する。彼らは、そこに自分が抱える個人的「事情」を書き込んでいく。

投稿に際して、いくつかの取り決めがある。自分が置かれている状況について書いた用紙を持って、セルフポートレートを投稿することである。それは顔の一部でも構わない。また、名前は偽名を使うこともできる。そして、用紙の最後には必ずWe are the 99%とoccupywallst.orgを書くことが決められている。

このブログの目的は、九九％の人々の存在を、置かれている状況について、社会や一％の人々に知らせることである。

二〇一一年一一月にブログに投稿されたものの一部を紹介する（訳は筆者）。

・私は三つの精神障がいをもち、治療費を払うすべもない。大学には一万四〇〇〇ドルの学生ローンがある。大学は診断するに充分な治療を施すと、ためらいもなく私を大学から放り出した。現状満足は私たちの病気だ。

・私はとてもラッキーだ。仕事も家族も家も、テーブルには食べ物もある。

私には終わりの見えない八万ドルの学生ローンとビジネスローンがある。

私にはお湯も、暖房も、ボイラーを修理するお金もない。

・私は獣医として二〇年の経験をもっているが、ワンルームを借りるだけの仕事を見つけることができない。日々を生き延びるために、七月、急性ストレス反応と診断された。私は入院させられ、仕事はクビになり、強制退去になるだろう。二八日たつと、私

はホームレスになる。

・私は三八歳。大学の学費を払い終えるのに、ほぼ三〇年かかるだろう。こんなのなぜ。

・私はかつて家賃を払うのに時給八ドルで週に七〇時間働いていた。でも四月、ペル助成金をえることができた。学校に慢性感染症で退学すると言ったからだ。ハードワークが理由ではない。フルタイムの学生に戻れて感謝している。

ブログに登場する人々について、Marco Roth（マルコ・ロス）は論文「アメリカンドリームをあきらめて」のなかで、次のように描写した。

「タンブラーのサイトを見ると、米国で新たに多数派になりつつある人々を足して一つに合わせたような人物像が浮かび上がる。つまり、借金を背負い、高学歴すぎて、それに見合う給料や手ごろな就職先が見つからず、尊厳を奪われ、わが身と家族の面倒をどうやってみればいいのか、不安にさいなまれている人たちだ。彼らは、レイオフされ、組合には加盟しておらず、さらに過去の幻と化しつつある『中流層』という『階級意識』に危なっかしくしがみついている。」（Roth2011, 25：ロス二〇一二、一三～一四頁）

私たちがこの運動を理解するためのヒントが、このオープンブログの投稿文章のなかにあるように思う。ドキュメンタリー映像作家のBobbi Jo Hart（ボビー・ジョ・ハート）は、九九％の語り部を探している、とこのブログのなかで呼びかけている。今後、占拠運動に参加する人々の実態については、映像作家や研究者によって少しずつ明らかになるに違いない。

さらに、彼らの投稿は、取材や調査の問いかけによる返答ではなく、自らの意志で語られる赤裸々な告白である。それは同時に、運動や社会に同情や援助を求めるのではなく、尊厳を取り戻そうとしているかのようにみえる。そうでなければ、自らの顔（または顔の一部）をさらけ出して、自らの窮状を訴えるような行為には至らない。投稿の最後に、「私は九九％である」と記載することで、他者に九九％になろうと呼びかけ、さらなる運動へとつながっているのである。

3　合意形成の方法

(1)　ワーキング・グループ

ウォール街占拠運動における合意形成に至る過程は、次の三つの方法から成り立っている。

① General Assembly（全体集会）
② Spokes Council（グループ代表会議）
③ Working Group（ワーキング・グループ）

これまで幾度となく登場したワーキング・グループからふれていこう。これは類縁性を持つ集団として分けられる。占拠運動におけるその数は日々変化し、二〇一一年一一月当時は五〇グループほどだったのが、二〇一二年六月一四日現在で九〇のグループがウォール街占拠運動のウェブサイト[10]に掲載されている。

ワーキング・グループはさらにその類縁性から三つに分けられる。①運営グループ、②コーカス、③その他のグループ、である。運営グループとは、占拠運動に関わる後方支援と財政に関わるグループで、具体的には会計や情報、医療、法律、台所、メディア、図書館などである。コーカスについては、すでに紹介したのでここでは省く。

ちなみに、グループのなかで人気があるのは、シンクタンク（八五〇人）、直接行動（八〇一人）、芸術・文化（七二〇人）、政治と選挙リフォーム（六一七人）である[11]。

各グループはTwitterやFacebook、メール、ウェブサイトで連絡を取り合いながら、公共スペースなどに集まって議論をする。そこで出された提案や意見は、全体集会やグループ代表会議で、再び議論されるという流れである。

(2)　全体集会

全体集会（General Assembly）は、個人で参加することが決まりである。だれでも自由に参加することができる。二〇一一年一一月に私たちが参加したときの全体集会は、毎週火・木・土・日曜日の夜七時から、ズコッティ公園の東側で行なわれていた[12]。参加者数は日によって違うが、私たちが参加したときは目算で二〇〇名以上はいただろうか。参加者で身動きができない状態だった。

集会はファシリテーターによって進行されるが、後ろのほうの人に発言者の声は届かない。しかし、占拠がスタートして間もなく拡声器を使用することを警察に禁じられてしまった。そこで考え出されたのが、People's Mic（rophone）（人間マイク）[13]だった。これは発言者の言葉を復唱することで、後ろの人たちに伝えていく、というものだ。必ず「マイクチェック！」というかけ声で始まる。

人間マイクは、映像で見ると一目瞭然である。参加者が復唱する声が会場内をこだまして、ドキュメンタリー作品というよりは、芸術作品でも見ているようだ。そして実際に自分がその中に入ってみると、見ず知らずの人たちとの不思議な一体感を味わった。これは体験した人にしかわからない感覚である。

ブロガーのJesse LaGrecaは人間マイクについて次のように語っている（訳は筆者）。

「人間マイクは一つにまとめる力である。聖歌隊のようで、現代の宗教的な復活のようだ。しかし、それは市民の復活である。ここで私たちは市民になる。」（Sharlet 2011）

占拠運動は期せずして、「人間マイク」という創造物を手に入れた。

(3) 合意形成のための手続き

この運動において注目すべきは、民主的な合意形成を実現するための手続きを設けていることだ。会議の進行役であるファシリテーターの重要性については、すでに述べた。ファシリテーターは議論の進行を維持し、グループが結論に至るのを助けるために積極的な役割をもつ。しかし同時に、中心的な役割であるゆえに、一人が権力をもつ場とならないようにファシリテーターを交代させなければならい。

また、議論の進行について意見をするための手続きもある。「ブロック」は、議題がグループの本質に反すると感じたときに、メンバーがその議題の採択を止めることができる。

このような合意形成の方法の利点として挙げられるのは、①人々が集まって何かをするときに簡単な方法である、②合意形成の方法がうまくいくと、メンバーの専門技術や知恵、エネルギーを生かすことができる、③メンバーの参加をより強力なものにする、④メンバーに強制できないことを認識している、ことである。

一方、最大の欠点として挙げられるのは、合意が形成されるまで、会議が果てしなく続くということである。この点を補おうために開催されるのがSpokes Council（グループ代表会議）である。占拠運動においては、二〇一一年一一月七日に初めて開催され、以後原則として毎週月水金の午後七時から開催された。全体集会は個人の参加が決まりだが、グループ代表会議はワーキング・グループごとで参加し、各グループ間の議論となる。グループ内ではすでに議論をしているため、グループを越えて意見を交換することになる。

4 二〇一二年六月の占拠運動

この原稿を書いている二〇一二年六月現在、占拠運動は予想に反して生き続けている。二〇一一年一一月一五日、ズコッティ公園の占拠者たちは警察によって強制排除されたが、占拠運動は現在も様々な場所で行なわれている。

しかし、つい最近、ニューヨーク在住の知人から気になるメールが届いた。全体集会が今年に入ってからうまく機能していないというのだ。その理由はいくつもあるが、なかでも精神疾患を抱えた参加者への対応がうまくいかないこと、また、当初から懸念されていた多数の参加者のためにうまく機能しない、という問題である。そのほかには、参加者の間に深刻な緊張関係が発生し、合意に至らないこともあるという。

このような問題は、ワーキング・グループではなく、全体集会とグループ代表会議で発生しているようである。

毎週発信されるメールニュースのOWS Updates for the Week of June 13（六月一三日の週のOWSアップデート）によれば、Community Meeting to discuss the General Assembly（全体集会について議論するコミュニティ会議）が六月一六日、ズコッティ公園で開かれる。そこでは、最近の全体集会における長所と短所を分析したうえで、占拠運動にうまく合わせるために、どのように集会を変えていくのかについて議論するという。

当初から無謀な試みとされた、すべての参加者の合意（Consensus）による集会は、その形を変えながら、人々はこれからも追求し続けるだろう。全体集会のような「直接民主主義」の方法を人々が求める限り、運動の変革こそが占拠運動を成功へと導くことができると信じる限りにおいて。

【補論】
日本人は、ビデオ『ウォール街占拠２０１１』をどう見たのか

私たちは二〇一一年一二月から、ビデオ『ウォール街占拠２０１１』の上映会を東京で開催してきた。そこでは、参加者から多くの感想や意見、質問を受けた。

そこでここでは、ある高校と、全共闘世代が中心であるＮＰＯの上映会での感想・意見を紹介する。

ウォール街占拠は当初、アメリカでもマスコミに注目されることはなく、インターネットの動画配信によって一気に世界へと知れ渡った。その後は、同様の占拠が全米や世界の各都市へと拡がっていく。

一方、日本ではその知名度は低いままだ。日本のマスコミは初期のアメリカ同様に報道することは少なかった。ウォール街占拠に関連する無数の動画はYouTubeで視聴できるが、日本語で視聴できる動画はわずかである。また、ウェブサイトのウォール街占拠に関連する主な記事や論文を集めた二冊の翻訳本が、二〇一二年になって出版されたにすぎない。

日本における占拠運動に呼応する動きも、二〇一一年一〇月にスタートした「Ｔｏｋｙｏオキュパイ」などいくつかあるが、その後の拡がりを実感できない。

では、日本人、とくに若者をとりまく社会環境は幸福度が高いと言えるのか。二〇一〇年度と二〇一二年度に明治大学で労働者の権利をテーマに寄附講座を企画・実施した経験から言えば、若者をとりまく労働環境は厳しくなっていると言えるだろう。それはＯＢ・ＯＧの職場経験からも、学生をとりまく友人・知人の経験からも伺い知ることができる。

ところで、ビデオ上映後の感想・意見のほとんどは、合意形成型の運動に関係するものだった。合意形成の前提には、一人ひとりが抱える問題の意識化が必要になる。しかし日本において、それらの問題は社会のなかに深く沈殿したままだ。私たち自身によって、問題が社会化される日は来るのだろうか。そのときに、私たちは占拠運動から運動化へのヒントを得ることができるのだろうか。

今後、社会・経済環境が好転しない限り、好むと好まざるとに関わらず、そのときは必ず来ると私は思う。問題を打開する市民の側からの選択肢が、おそらくほかには残されていないだろうと考えるからである。

高校での上映会

・占拠運動を初めて知りましたが、とても意義のあるものと感じました。しかし、日本ではあまり報道されていないことに怒りを感じます。日本では、デモやストライキのことを、どこか他人のことと考える風潮があると思います。そして、「そういう人たちは……」という軽蔑の眼が向けられている気がします。アメリカの高校生たちが行動していることを、日本の高校生たちにも伝えていかなければならないと思います。（一年女子）

・今まで私が見たことのない話し合いの仕方になっていて、すごく驚きました。「話し合い」の方法も考え直さなければいけないとは思いますが、これは「話し合い」というより、自分たちの「自己主張」であるということが大事だと思います。また、話し合いを認めたうえで、空間を提供することができるのも日本とは異なっています。

同じ世界なのになぜ日本では実現しえないのだろうか。国民の政治への関心が薄いからか。政治家が利益を尊重しているからか。暮らしが全体的に水平な水準になってきたからか。私たちもウォール街の人たちと同じ気持ちで熱意を持っていたい。（一年女子）

・恥ずかしながら今日まで何も知りませんでした。占拠運動と聞いて、はじめは過激派の集まりだと思いましたが、実際は全然違っていまし

た。一七歳の高校生がよく考えて発言していることに感動しました。「中間層と底辺が同居できる刺激的な瞬間」といった風な表現がとても面白いと思いました。（三年男子）

NPOでの上映会

・これまで実行委員会形式で運動をつくってきたので、今日の報告にあったような新しい合意形成の方法にどれくらい馴染めるのか、不安が残ります。

かつて六〇年代後半から七〇年代における全共闘運動や反戦青年委員会において、かなりおもしろい運動をつくる可能性がありました。反戦青年委員会は、労働組合の青年部が集まってつくられました。次第に現場の労働者がいろいろな運動を自主的に始めて、全国に拡がっていきます。最後は、社会党や総評も統制できませんでした。そこには、いろいろな合意形成の方法があって面白かった。しかし、非暴力・直接行動でなく、日本では内ゲバが起きたことが、いろいろな可能性を摘んでしまったと思う。

では、それを克服する方法として、今日の報告のような合意形成の方法が良いのか、私にはまだよくわかりません。

・自分たちで決めて運動を実行しているという高揚感は、これまでの人生の中で二度あります。だからこの占拠運動に希望を感じるというのはわかります。しかし、この運動をどのように持続するのか、という疑問があります。

また、占拠運動にはアナーキストの影響があります。私たちの運動の時もそうでしたが、彼らはすべての権威を否定して魅力的な運動を展開します。しかし、持続性や多数派形成という観点から言うと、どうなのだろう。

ただ、占拠運動は徹底した非暴力を貫いているのが救いだと思います。私たちの時は愚かしい過ちを冒したと感じます。

・直接民主主義の運動の高揚は、日本にもあったと実感します。しかし、人々の発意にもとづく自由な運動の盛り上がりには、必ず後退の局面が生まれます。そのときに必ず左翼の党派が登場します。この人たちは疲れません。政治目標を別に持っているからです。彼らは大衆の高揚のリズムとは別に、大衆が疲れるのを待って、大衆をオルグしていきます。

彼らの運動の根拠には暴力によるロシア革命がありました。今回の占拠運動は、このロシア革命が敗北したうえで生まれました。だからアナーキストの運動も含めていろいろな思想が復活しています。その意味で、私は今後の運動に悲観をしていません。

・占拠運動は創造性の賜であると感じました。権力に従う傾向の強い日本人に、合意形成型の運動スタイルが馴染むのかどうか疑問です。それでも、個人の意見に耳を傾けて、粘り強く合意を作り出す運動をつくることが、社会を変えるための近道だと思います。

（一七七四号につづく）

【ウォール街占拠運動関係ウェブサイト】

http://www.occupywallst.org/
http://www.nycga.net/
http://www.occupytogether.org/

【参考文献・資料】

＊サラ・ヴァン・ゲルダー＋『YES! Magazine』編集部編（二〇一二）『九九％の反乱：ウォール街占拠運動のとらえ方』バジリコ。

＊Graeber, David (2011), "Enacting the Impossible: On Consensus Decision Making" in *Occupied Wall Street Journal*, 3rd issue, October 22, 2011. http://occupywallst.org/article/enacting-the-impossible/で閲覧できる（二〇一二年六月二四日アクセス）

［邦訳：デビッド・グレーバー（二〇一二）「不可能を可能にする：総意による決定」サラ・ヴァン・ゲルダーほか二〇一二所収、四二～四五頁］

＊Kroll, Andy (2011), "How Occupy Wall Street Really Got Started" in motherjones.com, October 17, 2011.［邦訳：アンディ・クロール（二〇一二）「ウォール街占拠はそもそもどのようにして始まったのか」サラ・ヴァン・ゲルダーほか二〇一二所収、三三～四一頁］

＊Lim, Audrea (2011), "Chinatown is Nowhere" in Astra Tylor et al. (ed), *Occupy! Scenes From Occupied America*, Verso, 2011.［邦訳：オードリー・リム（二〇一二）「チャイナタウンの不在」『オキュパイ！ ガゼット』編集部編（二〇一二）

『私たちは〝九九%〟だ―ドキュメント ウォール街を占拠せよ』岩波書店]
* Roth, Marco (2011), "Letters of Resignation from the American Dream" in Astra Tylor et al. (ed), *Occupy! Scenes From Occupied America*, Verso, 2011.[邦訳：マルコ・ロス（二〇一二）「アメリカンドリームをあきらめて」『オキュパイ！ガゼット』編集部編（二〇一二）『私たちは〝九九%〟だ―ドキュメント ウォール街を占拠せよ』岩波書店]
* Sharlet, Jeff (2011) "Inside Occupy Wall Street" in Rolling Stone, November 10, 2011. http://www.rollingstone.com/ で閲覧できる（二〇一二年六月二四日アクセス）
* Sitrin, Marina (2011), "Horizontalism: From Argentina to Wall Street" in *NACLA Report on the Americas*, November/December 2011, Volume 044, Issue 6.
* Sitrin, Marina (20069), *Horizontalism: Voices of Popular Power in Argentina*, AK Press.

【参考ビデオ】
* Labor Now (2012)『ウォール街占拠２０１１』（日本語字幕版 一三分）
http://youtu.be/INtHFqv5Y7M
* Meerkat Media Collective (2011)『コンセンサス（直接民主制@ウォール街占拠）』（日本語字幕版 八分）http://youtu.be/89dMrnqqx0U

【聞き取り】
* Holder, Kanene 二〇一一年一一月一二日
* Ness, Immanuel 二〇一一年一〇月二七日、一一月一四日
* Sitrin, Marina 二〇一一年一一月一日
* Stam, David 二〇一一年一一月一二日
* Suchdev, Sonny 二〇一一年一一月四日
* Vazquez, Lucas 二〇一一年一一月八日

（1）YouTube ビデオ "PEACEFUL FEMALE PROTESTORS PENNED IN THE STREET AND MACED!- #OccupyWallStreet". http://youtu.be/moD2InGTToA（二〇一二年六月二四日アクセス）

（2）本稿は青野恵美子と高須裕彦が二〇一一年一〇月二五日から一一月一七日までニューヨーク市に滞在して、共同で実施した調査によって収集した資料ならびにその後に収集した資料をもとに執筆した。調査は、ウォール街占拠運動に関与している活動家（研究者を含む）からのインタビュー、占拠現場での文書資料の収集、占拠現場の参与観察（公園への滞在、様々な会議への出席など）、活動家たちが記述した文書資料やウェブサイト上の情報の収集によって行なった。なお、本稿の㈠（本号掲載）は青野が執筆し、㈡（一七七四号掲載予定）は高須が執筆した。本研究は科研費（二二五三〇五七六）の助成を受けたものである。

（3）http://marinasitrin.com/（二〇一二年六月二四日アクセス）

（4）http://www.adbusters.org/blogs/adbusters-blog/occupywallstreet.html（二〇一二年六月二四日アクセス）

（5）http://takethesquare.net/2011/07/15/how-to-cook-a-pacific-revolution/（二〇一二年六月二四日アクセス）

（6）レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの略。

（7）ＯＷＳは Occupy Wall Street の略。

（8）https://www.tumblr.com/（二〇一二年六月二四日アクセス）

（9）http://weare the99percent.tumblr.com/（二〇一二年六月二四日アクセス）

（10）http://www.nycga.net/groups/（二〇一二年六月一四日アクセス）

（11）前記ウェブサイトによる。

（12）占拠当初、ＧＡは毎日午後一時と午後七時開催されていたが、その後は午後七時だけの開催となった（Luce 聞き取り）。一一月七日からＳＣが毎週月水金に開催されるようになったので、開催されない火木土日がＧＡの開催日となった。

（13）Human Microphone とも言われる。

（あおのえみこ）
（たかすひろひこ）